

沖縄の民間文芸にみる星・月・風

山里純 一

はじめに

九州から台湾にかけて弧を描くように大小の島々が点々と浮かんでいる。北から大隅諸島・トカラ列島・奄美諸島・沖縄諸島・宮古諸島・八重山諸島から成るこれらの島々を琉球列島と呼んでいる。さらに現在の沖縄県を構成する沖縄諸島・宮古諸島・八重山諸島は琉球諸島と呼ばれる。この琉球諸島の民話や古謡には、天体とりわけ星や月、そして風が豊富に詠まれているが、とりわけ八重山諸島に多い。そこで、沖縄の古人が暮らしの中で口頭伝承してきた天文に関する民間文芸を見て行くことにしたい。

一 沖縄の星の民話

(一) 北斗七星の由来譚

世界的に広がる「天人女房」は沖縄でも伝承されているが、下界に降りてきた天女は星であるという形式をとり、七つ星・群星の由来譚となる七つ星由来型「天人女房」あるいは「星女房」が特に豊富に伝承されている。

七つ星・群星由来型「天人女房」は、七つ星・群星の七星が男に羽衣を隠され、やむなく男の妻となり子供をもうけるが、

やがて羽衣を発見して昇天し、汚れの身だということでも小さな星を伴って二番目に位置することになったというものである。

「星女房」は、自らの意思によって下界に降りてきて男の妻となる、いわゆる「押しかけ女房」的展開を見せる。羽衣を伴わないものが多いが、八重山では昇天の際に羽衣が登場するものもある。しかしすべて結末は、柄から二番目の星の側に小さな星を伴った北斗七星の由来になっている。ここでは石垣市大浜の伝承例を挙げよう。

昔、あるところに貧しい親子が住んでいました。子供が三歳の時、両親が死んだため、その子供は隣の家の下男となり、朝晩、馬の草刈りを仕事としてあてがわれ、苦勞しながら成長していきました。大人になったある日のこと、草刈りに行った男が松の下で寂しそうな顔をして立っていると、どこからともなく女が現れ、

「なぜ、こんなところに立っているのですか」と尋ねました。男は、

「私は三歳の時、両親と死に別れ、隣の家の下男になっていますが、この松の下に来ると父と母のことを思いだし、立ち尽くしてしまうのです」と話したところ、その女は、

「偶然ですね。実は私もあなたと同じ境遇にあります。是非ともあなたの妻になりたいので、結婚してくれませんか」と言い、こうして二人は結婚することになりました。二人で精を出して働いた結果、粟倉や米倉なども造れる程裕福になり、また

子供にも恵まれ、幸せな生活を送っていました。

ある日、夫は妻に、

「実は、親の葬式の際、隣の家から着物を借りたが、その返済もまだ済んでいない」と話したら、妻は、

「わかりました。私が何とかしますから心配しないで下さい」と言つて、夫を安心させました。

ある晩、夫が寝ていると、仕事部屋から数人の女の声とガサガサという物音が聞こえたので、翌朝、夫は妻に、

「昨夜は何をしていたのか」と聞くと、

「あなたが隣から借りてきた着物の返済をするために、姉妹を呼んで布を織っていたのよ。これを隣の家を持って行って下さい」と妻はにこにこして答えました。

「ありがとう。長い間、気になっていたが、お前のおかげで、隣の家への返済ができてホツとしたよ」と夫は妻にお礼を言いました。

しばらく経つたある日のこと。夫婦で夜空を眺めながら話をしていると、夫が、

「おや？、七ツ星のうち一番上の星が消えているよ、ほら見てごらん。これは一体どういうことだろう」と、妻に声をかけました。すると妻は急に寂しそうな顔をして黙り込んでしまいました。そしてか細い声で、

「その星が実は私なのです。あなたがそういう話をしてしまったので、残念ですが、私はもう天に帰らなければなりません」と言いました。びつくりした夫は、余計なことを言つてしまつ

たことを詫びて、行かないように説得しましたが、天の掟とあつてはどうにもなりません。妻は隠しておいた羽衣を取り出して、それを着ると子供を抱いて天に昇つて行ってしまいました。天に帰ると、

「私は、地上に降りて人間と結婚し、人間との間に子供までもうけた身なので、一番上で耀くことはできません」と言つて、二番目の位置に座ることになりました。その側に小さく見える星は、地上から連れていった子供だと言われています。

北斗七星の柄の先から二番目の星（ミザール）の側に小さな星が見える。アルコルと呼ばれるが、こんな小さな星をよく観察していて、沖繩の民話の「天人女房」はその由来譚となっている。

(2) 北極星の由来

北極星は沖繩方言では「にぬふあぶしい」という。「にぬふあ」とは「子の方」すなわち北の方角のことである。北極星は真北に位置する「不動の星」ということで羅針盤が発明される以前は航海の目印とされた。沖繩のわらべ歌「ていんさぐぬ花」の一節はよく知られている。

夜走らす船や

子ぬ方星 見当てい

我ん生ちえる親や

我んどう 見当てい

夜中に航海する船は

北極星を目標にする

私を産んだ親は

私を目標としている

その北極星の由来について、石垣市白保の米盛一雄氏は次のように語っている。

昔、八重山のある村に、二人の兄弟が住んでいました。父親は亡くなり、母親一人で、二人の兄弟を育てていました。兄はなまけ者で、ブラブラ遊んで日を送っていました。弟はまじめで一生懸命に働き、苦勞してきた母親を大切にしながら暮らしていました。

ところがある日、母親が重い病気にかかってしまいました。弟は、母親の側を片時も離れず、心を込めて看病しました。

一方、兄はといえば、母親のことも忘れ遊びほうけていました。

弟の看病もむなしく、母親の病気はいよいよ重くなり、とうとう亡くなってしまいました。泣く泣く野辺送りをすませましたが、弟の悲しみはつるばかりでした。

こうしたある日、みすばらしい身なりのおばあさんが現れ、「あなたは、どうしてそんなに悲しんでいるのですか」と弟に尋ねました。弟は、

「実は、大事なお母さんを亡くしてしまい、お母さんに会うことができないのが悲しいのです」と答えました。するとおばあさんは、

「それは何ともお気の毒ですね。人はいつかは死ななくてはならないのです。でも、あなたは、そんなにお母さんに会いたいですか」と言うので、

「はい、ぜひ、もう一度、お母さんに会いたいです」と言いました。するとおばあさんは、

「わかりました。それ程までに会いたいのなら、私があわせてあげましょう。お兄さんと一緒に来て下さい」と言って、二人を大きな川の側まで連れて行きました。

そこには一艘の小さな舟があって、二人の兄弟はその舟に乗り込みました。

「一生懸命に漕ぐのですよ。向こう岸に着けばお母さんに会えますよ」と。

二人はおばあさんに言われた通りに、力の限り漕ぎ続けました。ところが川幅が広く、漕げども漕げども、向こう岸には着けませんでした。

すっかりへたばってしまった兄は、とうとう、

「もうだめだ、いくら漕いでも、向こう岸には着かないよ。俺たちはだまされたんだよ」と權を投げ出し、舟の中で寝転んでしまいました。

しかし、弟はあきらめません。母親に会いたい一心で舟を漕ぎ続けました。しばらく行くと、川の流れが急に速くなり、小舟はみるみるうちに流され、ゴゴッというものすごい音とともに滝に呑み込まれてしまいました。

「あー、もう駄目だ。お母さん助けてー」と弟が叫んだ時、あのおばあさんが現れ、弟をさっとすくい上げると、天に昇っていききました。

「あつ、おばあさん」

「そうです。私は実は女神です。約束通り、あなたのお母さんに会わせてあげましょう」

こうして弟は、なつかしい母親に会うことができました。そして、

「あなたは親孝行だから、これからは世の中の人々の模範として、皆の目標となちなさい」と言って、弟を北の空に耀く子の方星（北極星）にしました。

一方、兄の方は、

「あなたはもう少し苦勞しておきなさい」と、川の中に残されてしまいました。

今でも天の川の中に、多くの星から離れて一つだけさびしく光っている星があります。それはいまなお舟を漕ぎ続ける兄の星だということです。

親思いで働き者の弟を北極星に、怠け者の兄を天の川にかかると、はくちよう座の一等星デネブに宛てた星の由来譚である。

米盛一雄氏は八重山では唯一の百話クラスの語り手であるが、大半は祖父から聞いた話を伝承していた。この話も祖父から聞いたものであるというが、何とこれと似た話はアイヌの伝説「働き星・なまけ星」に見える。⁽¹⁾ その梗概を掲げよう。

・貧しい母親と二人の息子が住んでいたが、母親は重い病氣にかかって死ぬ。

・兄弟は母親を戻してくれるように天の神様に祈ると、みずほらしい姿のおばあさんが現れて、「私を舟に乗せて川の

向こうまで渡してくれたら、お母さんに会わせてあげる」と言ったので、喜んで舟を漕ぎ出す。

・いくら漕いでも舟は向こう岸に着かないので、兄は怒って櫂を放り投げて寝てしまいが、弟は母親に会いたい一心で舟を漕ぎ続ける。

・この様子を見ていたおばあさんは女神の姿になって、弟を抱いて天に登っていく。

・びっくりした兄は飛び起きて自分も連れて行つてと叫ぶが、舟はどんどん流されて地獄へ落ちて行く。

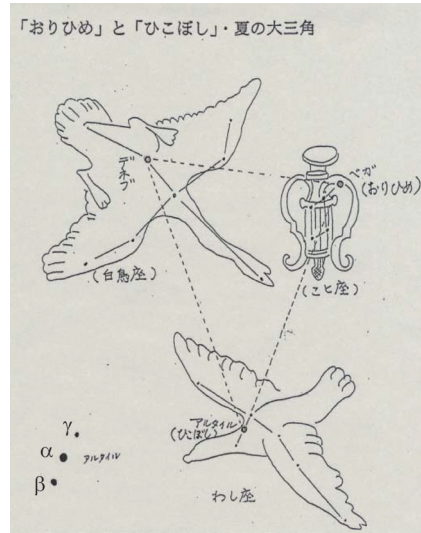
・これがヒコボシとそれを挟む二つの星である。

話の内容はほぼ同じであるが、結末が相違する。すなわち、アイヌの伝説では、おばあさん（女神）は、わし座（ヒコボシ）のα星（一等星のアルタイル）、その東の暗い四等星のγ星は怠け者のお兄さん、西側のそれより明るい三等星のβ星は働き者の弟であるとする。ちなみにこれらの三星をアイヌではウナルペクサノチウ（老婆を舟で渡す星の意味）と呼んでいるという。

石垣島の話者は「にぬふあ星の由来」として語っているが、はくちよう座のデネブの由来にもなっている。話型的にはどちらかといえば「兄弟星」である。

いずれにしても日本の北と南に伝わる同じ話が、南では人々が方角定め星として注目した北極星と天の川の中にかかるひととき目立つ一等星のデネブの由来譚となり、北ではわし座の由来譚となっているのは、それぞれの伝承地における星をめぐ

る生活環境および精神風土が影響しているであろう。



(3) はいが星の由来

ある村に乳房が四つ（三つと語られる場合もある）ある女がいて、その噂は首里の王様の耳に入り、女は呼び出される。女には二人の子供がいたが、自分が帰って来れない時は、星になって現れるので、その星を見て農業していくように言い残して出かける。しかしいつになっても母親は帰ってこなかった。そこで南の方を見ると二つの星が現れていたの、子供たちはこれを見ながら農業をし生活して行った。

この民話は八重山諸島の黒島という小さな隆起珊瑚礁から成る島に伝わるものである。例話以外にも、普通の人と異なり乳房が四つある女が人柱となったとか、鍋に入れられて油を取り、その油が王に送られたとも語られるが、いずれも母親は

「はいが星」になって現れる。その「はいが星」は、ケンタウルス座の α 星と β 星のことである。これが夕方、南の空で水平に並ぶ季節が稲刈りの時期で、明け方に水平に並ぶ季節が田植えの時期であるとされた。

(4) 子供の寿命（米寿の由来）

北斗七星と南斗六星が出てくる民話は、沖縄県内では沖縄本島・宮古諸島で広く伝承されている。沖縄本島中部うるま市具志川における伝承例を挙げよう。

昔、あるところに母と娘がいました。早朝、カー（井）に行って水汲みをするのが娘の日課になっていました。ある日、娘がカーに行くと、髭を生やし杖をついた老人が現れて、「もったいない子だね」とつぶやいたそうです。

「もったいない。かわいそうな子だね。本当に」と、何度も立ち止まっては、ため息交じりに独り言を言っていたらしい。

水を汲んで家に帰った娘は母親に、

「髭を生やし杖をついたおじいさんが私の顔を見て、『もったいない』『かわいそうだ』と何やらつぶやいていたよ。なんでかね」と話しました。母親にも意味がわかりません。

「そうだったの。じゃあお母さんが、そのおじいさんに会って、どういうことなのか聞いてみようね」と、母親は急いでカーのところへ行くと、それらしきおじいさんが立っていました。

「あなた様が、私の娘に『もつたいない子だね』とか『かわいい
そうな子だね』とおっしゃった方ですか」と、母親が尋ねる
と、

「そうだよ」と。

「どういう意味で、そういうことをおっしゃったのですか」と
聞いたたら、

「あなたの子は十八才の寿命しか与えられていないよ」とおっ
しゃったので、びっくりして、

「私の娘は今年十八才ですよ。年が明けたら十九才になるの
で、今年までしか生きられないということでしょうか」

「残念ながらそついう運命になっているようだ」

「私の娘は徳があつてあなた様の目に留まつたと思ひますの
で、どうかあなた様のお力で、どうか私の娘の命を助けて下さ
い」と母親は泣きながらお願いしました。

「私は神の使いで下界に下りてきて、たまたまその娘に出会っ
ただけで、私は助けることはできませんが、北の星の神と南の
星の神が碁を打っているところを教えますので、そこへ山猪の
刺身を和え物にして持つて行って、碁に夢中になっている二人
の神の間にそーと置いておき、あなたは知らん振りして側にい
ておきなさい」とおっしゃったので、母親は教えられた通り、
山猪の刺身の和え物を作つて、北の星神と南の星神が碁をして
いるところへ行き、それを二人の神の間に置きました。二人の
神は碁に夢中になつていたので、そのことに全く気づきませ
ん。打ち終えた後、目の前に山猪のさしみの和え物があつたの

で、お互い相手を持つてきたものだと思つて二人でおいしく食
べた。食べ終わった後、一人の星の神が、

「これはお前のもてなしか」と言うつと、

「俺ではない。お前のもてなしではないのか」

「いや、俺ではない」と、言い合つているところに母親が出て
行き、

「これは私がお持ちしたものです」と申し上げました。

「お前は、どういうわけで、この山猪の刺身を持つてきたの
か」と聞かれたので、

「はい。何月何日に、娘がいつものように朝早くカーに水汲み
に行つたら、しかじかの風貌のお爺さんから『もつたいない
子』と言われたようなので、私がお会いしてお話を
伺つたら、十八才までしか生きられないことになつているとの
こと。そこでお二人の星の神様にお願ひしてみるようにと言わ
れて、このようにやつてきました」と言つたら、

「あなたが持つてきた山猪の刺身も食べてしまつた以上、断る
わけにもいかないね。それでは十八の十の上に八の字を書き足
して、寿命を八十八才としてあげよう」と言われ、十八才で亡
くなるはずだつた娘は八十八才まで長生きできたということだ
す。それで八十八才にはトーカチ（米寿）のお祝いを盛大にす
るようになったということだよ。

もともとこの話は中国・東晋代に干宝という人が著した『捜
神記』に見えるものである（干宝『捜神記』竹田 晃（訳）平凡

社、二〇〇〇年)。そこでは十九歳までとなっている寿命を、上下の数字を顛倒させるしるしをつけ、九十歳としたとある。

沖繩の民話が『搜神記』の影響を受けたものであることは明かである。しかし「北の星の神」と呼ばれる北斗七星や「南の星の神」と呼ばれる南斗六星が、それぞれ死と生を司る神であるという中国の北斗信仰は、少なくとも各地の同じ話型の民話に見る限り感じられない。

沖繩では米寿の祝いをトーカーチ（斗搔き）の祝いという。竹の片方を斜めに切り、米を入れてお祝いに訪れた人に配ることに由来する。しかしこの長寿祝いは日本本土から移入されたものであり、比較的新しい習慣であるが、中国伝来の話をうまく米寿の由来に置きかえたものが沖繩諸島を中心に各地で傳承されてきたのである。

以上、沖繩の民話においては、「天人女房」の北斗七星、そしてきわめて珍しい北極星に関する民話が語られていて、それぞれ独特の由来譚となっている。ケンタウルス座の α 星と β 星が農業の開始時期の目印となるのも、緯度の関係で八重山諸島ならではの観測と知識にもとづく話である。また中国の北斗信仰にもとづく話は沖繩にも伝えられているが、沖繩では北斗信仰そのものよりも、これを米寿の由来に置きかえて傳承しているのである。

二 八重山古謡に見える星

八重山の人々が、農耕の時期を判断したケンタウルス座の α 星と β 星については、前節で紹介した「はいが星」の由来譚が伝わっている。農耕の時期を判断する上でもっともよく利用されたのが、スバルである。スバルは八重山では、むりか星、ふな一星、うふな星、くなく一星などと呼んでいる。喜舎場永珣氏は、「ふな一」は「くなく一」の転で、「くなく一」の語源は組、すなわち「組み合っている星」の集団という意味であろうとい⁽²⁾う。ふな一星について謡った次のような古謡がある。

- 一 フナー星ば 見^み当^あていし フナー星を目標にして
※〈我が島どうヨ 島^{むら}ぬ本^{もと}ゆ ナライズ〉
- 二 廻^{めぐ}り星ば 見^み当^あていしどう 廻^{めぐ}り星を目標にして
我が島こそは島の本と言っている
- 三 麦^{むぎ}作り 稔^{のう}らし 麦^{むぎ}を作^{つく}って稔^{のう}らして
- 四 麦^{むぎ}ぬ稔^{のう}り ザーラザーラし 麦^{むぎ}の実^みり様^{よう}はザラザラという音
- 五 粟^{あわ}作り 稔^{のう}らし 粟^{あわ}を作^{つく}って稔^{のう}らして
- 六 粟^{あわ}ぬ稔^{のう}り 黄^く金^が色^{いろ} 粟^{あわ}の实^みり様^{よう}は黄^く金^が色^{いろ}
- 七 米^{こめ}作り 稔^{のう}らし 米^{こめ}を作^{つく}って稔^{のう}らして
- 八 米^{こめ}ぬ稔^{のう}り スタマしじ 米^{こめ}の实^みり様^{よう}は数^{かず}珠^{たま}玉^{たま}のよう^{よう}だ
- 九 黍^{あわ}作り 稔^{のう}らし 黍^{あわ}を作^{つく}って稔^{のう}らして
- 十 黍^{あわ}ぬ稔^{のう}り 牛^{うし}尾^びぬぐと^とう

黍の実り様は牛の尾のようだ

十一 芋作り 実らし 芋を作って稔らして

十二 芋ぬ実りや ピンティイカントイ

芋の実り様は突き出た格好

ふな一星を農耕の目当てとしている私たちの島こそが、「島の本」であると言ひ、それを見て農作した麦・粟・稲・黍・芋などの豊かに稔った穀物の様子が謡われている。

「はいが星」の場合は、二つの星が水平に並ぶことが目安となったが、スバルの場合は、その方角と高度を目安としたように、それを知るための「星見石」が置かれた。

八重山の人々にとって、スバルがいかに重要視されたかを示す古謡が「むりか星ユンタ」である。

ユンタとは八重山古謡の一つのジャンルで、労働歌である。その語源は「結び歌」あるいは「詠み歌」などと言われるが定説はない。むりか星とはおうし座のプレアデス星団すなわちスバルのことである。「群らがっている星」という意味からムリ星・ムリカ星とも言ったが、スバルは八重山諸島では天の真上を通る。また農耕の目安ともなり、常に人々の注目を集めていた。そのむりか星に関する古謡が八重山の各地に伝えられている。ここでは石垣村のものとと思われる宮良当壮『八重山古謡』に載せられている対訳付きの「むりか星ユンタ」を掲げよう。

「むりか星ユンタ」歌詞	訳 (宮良当壮)
一 南七ち(シ) 星どヨ(ササ) 天ヌア(ヌ) 前カラ 島ウタイ	一 南の七つ 星は 天の主(天帝)の 御前から 島を統べよと 云われて
二 (イ) デユチャラ (ササ) 国ウターイ 我ヤ島 ウタルヌ 是ヤ国	二 云われて 国を治めよと 云われて 私には島の 指図はできません 私には島の 下知は出来ない(と答えた) 不承知であった ために
三 (イ) デユチャラ ウタルヌ 是ヤ国 ウタルヌ 否デ言ズダル 所以ど 厭デ言ズダル 因ビ	三 私には島の 指図はできません 私には島の 下知は出来ない(と答えた) 不承知であった ために 否と云った 罰で
四 南ヌ方ニ (又は午ヌ方ニ) 踏ン下シ 未ヌ方ニ 打棄ンド 卷踊シ	四 南の隅ッコに 追込められ 未の方角に 押落された 卷踊をして 居るであらう ぐるぐる踊りをして 居るであらう
五 居ンサ 結踊シ 北七ち(シ) 星どヨ 天ヌア(チ) 前カラ	五 居るであらう ぐるぐる踊りをして 居るであらう 北の七つ 星は 天の主(天帝)の 御前から
七 居ンサ 結踊シ 北七ち(シ) 星どヨ 天ヌア(チ) 前カラ	七 居るであらう ぐるぐる踊りをして 居るであらう 北の七つ 星は 天の主(天帝)の 御前から

八	島ウタイ デーユチャラ 国ウタイ
九	我ンヤ島 ウタルヌ 是ヤ国
一〇	ウタルヌ 否デ言ズダル 故ト 厭デ言ズダル
一一	子ぬ方に 踏ン下シ 丑ヌ方ニ 打棄ンドー
一二	(イヤ) 卷踊シー 居ンサー 結踊シー 居ンサー
一三	ムリカ星 星トヨ
一四	天ヌアーぢ 前カラ 島ウタイ
一五	デーユチャラ (ササ) 国ウタイ デーユチャラ ウーフデ承キダル

八	島を統べよと 云われたら 国を治めよと 云われたら
九	私には島は 統べられぬ 私には国は 治められぬ (と答えた)
一〇	否と云った ために 不承知と云った 罰で
一一	北の隅ツコに 蹴落され 丑の方向に 打遣られた
一二	卷踊りをして 居るのであるう 乱舞をして 居るのであるう
一三	昂星と云う 星は
一四	天のあるじ (天帝) の 御前から 島を統べよと 云われたら
一五	国を治めと 云われたら 畏まりましたと申上げた

故ト ウーフデ承キダル 因ト	ために ハイ (謹諾) とお答えした ために
一六 島ぬ真上 通ルンドー 天ぬ中	一六 島の真上を 通ります 天の真中を 通ります
一七 シーユラバ 物作る ムリカ星ゆ 見当てシー	一七 農作を する時には 昂星を 見当てにしよう

この古謡には、「天ヌアーぢ」と、「南七ち星」「北七ち星」、そして「ムリカ星」が登場する。「天ヌアーぢ」は宇宙を支配する天帝のこと、「南七ち星」は南斗六星のこと、実際には六つの星から成るが、形が北斗七星と同じ柄杓の形をしていることから、北斗七星に対応させるため修辭的に七つ星と言ったと思われる。「北七ち星」は文字通り北斗七星のことである。「ムリカ星」は前述の如くスバルのことである。

この「むりか星ユンタ」の内容は次の通りである。

天帝が南斗六星を呼び「島を統べよ」と命じたが、南斗六星は自分にはできないと断わった。それで南の方に追い落とされ、卷踊りを踊るように南の空をグルグル回っている。今度は北斗七星を呼び「島を統べよ」と命じたが、北斗七星も自分にはできないと断わった。それで北の方に追い落とされ、卷踊りを踊るように北の空をグルグル回っている。そこでスバルを呼

び、同じことを命じたところ、スバルは承諾した。それでスバルは島の真上を通ることになり、人々は農作の目当てとした。

古謡では、北斗七星と南斗六星、そしてスバルの対照的な運行をよく観察していて、それを謡に詠んでいる。すなわち、スバルは天の真ん中を東から西に一晩かけてゆっくりと動くのに対して、北斗七星は、北極星を中心に反時計回りに円を描いて動いている。また南斗六星についても、南極星というものが存在しないものの、南極点を中心に、東から西へ小さな半円を描いて動いている。この南北に見える同じ柄杓状の星座の運行が、スバルに比べて、せわしくぐるぐる回っているように見えることから、祭りなどで、輪になって踊る巻踊りに例えたのである。

三 沖繩の月の民話

沖繩では月に関してもさまざまな民話が伝承されている。

(一)「アールパンナー」(梗概)

旱魃で島中饑饉となり、病氣も蔓延し、多くの人々が死んでいったので、物知りが、皆で山に登ってお月様にお祈りするようになる。そこで島の人々は満月の日に山に登って祈願したら、お月様は妙薬を与えるから月に取りに来るように言う。しかし誰も受け取りにいけない人がない。そこにアールパンナーという、頭が雲につくような大男が現れたので、その人に頼むことにした。アールパンナーは雲雀と鶉を連れて出かける。月に

着いたがアールパンナーは門番に入場を断られ暴れたので、月の女神が来て術をかけ仁王立ちのまま動けなくした。それが月の中に見える影だという。雲雀と鶉は月の女神から不老不死の薬をもらって地球に戻ってきたが、途中、野苺がいっぱい生えているところで遊んでいる隙に、ハブがやってきてその薬をこぼしてしまう。その時、不老不死の薬がハブの体にかかったため、ハブは脱皮して長生きできるようになった。雲雀は怒ってハブを捕まえようとしたが、逆に足を踏まれたため曲がってしまった。鶉は逃げたがハブに尻尾をつかまえられ尻尾がちぎれたので尾が短いのだと。島の人はいくら待っても妙薬が届かなかったが、そのうち饑饉も病氣もなくなった。

この話は石垣市で聴取されたもので、前段は、月に見える影が術を掛けられて動けなくなった大男アールパンナーの姿であるとする話で、後段は、月の女神から預かった不老不死の薬をハブが浴びてしまったこと、雲雀と鶉がハブと死闘した結果、今の形・姿になったという話である。前段の話について沖繩本島では「アカナーと鬼」として語られ、鬼を欺いて追いかけられたアカナーが月に助けを求め、鬼に片足を食われながらも恩返しに、片足で潮汲みに行く姿だとする。また後段については、ステイ(巢出)水と死水の話として語られることが多い。すなわち、天の神様から人間にはステイ水を、ハブには死水を浴びせてくるように命じられた使が、途中で休憩している間にハブがやってきてステイ水を浴びてしまう。そこで仕方なく死水を人間に浴びせることになった。そのためハブは脱皮して長

く生きるようになり、逆に人間は死ぬようになったという。さらに使いの者は天に帰ってそのことを告白すると、天神は怒って、使いを二つの桶を担いで月に居るように命じたので、月の影はその姿であるという。

月の影がどのような姿に映るかによって話の登場人物が創られているが、ここで重要なのは、月に不老不死の薬、またはスデイ水と死に水があり、月が人間の死と不死に関係する天体と認識されていることである。月の満ち欠けが人間の生と死を連想させたからであろう。そして、月の女神は地球の人間に対して慈愛の気持ちを持ち不老不死を与えようとしたが、使者の怠慢により無に帰したことが語られている。

(2) 「十五夜の由来」(梗概)

月夜の晩、友達三人で遊びに行ったら、一人の人の影に首がない。物知りのお婆さんに占ってもらったら、一番大事な人を射なければ命がないと言われ、女房に向けて矢を放つと、矢は隠れていた間男にあたる。それで十五夜には月を拝むようになった。

この話は「首のない影」という話型⁽³⁾で、長野県でも聴取されるようであるが、特に奄美・沖縄諸島に集中して分布する。その中でも八重山諸島が圧倒的に多い。日本本土の場合と違って、奄美・沖縄諸島の話は月の信仰の由来となっているが、さらに細かく見れば、奄美諸島は二十三夜の月待ち行事、沖縄諸島では八月の十五夜、月見の由来となっている。これに対して

八重山諸島では、十五夜に供えるフチャギと呼ばれる餅の由来となっている、表面に付着した赤豆は殺した人の血の色と伝えられている。

このフチャギの由来は八重山諸島においてのみ聴取されるもので、沖縄本島では別の話になっている。うるま市与那城にはフチャギに関してつぎのような民話が語られている。(話者…久田トシ)

ある士が、妻を探すために、身分を隠し物乞いをしながら家々を訪ね歩いてきた。たまたまフチャギを煮ていた家に入り、フチャギを物乞いしたところ半分しかあげなかったので、「十五夜の月や まん丸くあしが、十五夜ぬフチャギや 半分ある(十五夜の月はまん丸いが、十五夜のフチャギは半分しかないさ)」と歌を詠んだらしい。すると女は、「半分ぬ餅や白雲にかかてい 今る出じゃびる(半分の餅は白雲にかかて、今出るんですよ)」と返して、残りの半分の餅を差し出したそうだ。これを聞いて士は、この女を妻にした。

白雲とはフチャギを蒸す時に出る湯気のことと、それを白雲にたとえて、自らを満月にたとえて、最初は控えめにつつましく、それからすべてを出し切る、乙女心を歌にしたのである。北中城村の民話はこれとは少し異なっている。

ある念仏者が金持ちの家に十五夜の餅をもらいに行ったら、半分だけ切ってあげたので、「十五夜ぬう月 片側る照ゆる(十五夜の月は片側だけが照っている)」と歌ったら、この家の人は、少しは感づいて、「雲に隠りやに 今どう出じゆる(雲

に隠れていたもので、今出てきた」と、残りの半分も出して、一個全部あげた。

ここでは、ケチな行為をごまかすために、白雲に隠れていた月をひきあいに出している。

いずれにして沖繩本島の民話では、表面に赤豆が付いたフチャギの形の由来譚にはなっていない。

(3) 「子供の寿命」(梗概)

子供が道を歩いているとお爺さんから「お前は十八歳までしか命がない」と言われる。その子供は驚いて母親に話すと、母親はその爺さんを追いかけて、「どうすれば子供は長生きできるのか」と聞くと、「八月十五日に、どこどこで神たちがみんな集まって月拝みをしているから、フチャギという餅を作って、持って行きなさい」と言ったので、教えられた場所に行った。そこにお偉い神に「どうしてここに親子がいるか」と聞いたので、その方にこれまでのいきさつを話すと、「十八の上に八を書いて八十八にしなさい」と言われたので、その子は八十八歳まで長生きしたことから、八月の月拝みが行われるようになった。

この話は大宜味村謝名城の金城マカさんが語ったものであるが、内容は、前掲の「米寿の由来」と同じである。しかしここでは子供の寿命の延長を決めるのは死を司る北斗七星ではなく、「月拝み」の場所に居た最も地位の高い神となっていて、結末は「八月月拝みの由来」となっている。

(4) 「屋慶名アカーと十日月」(梗概)

首里の龍潭池を掘るために各村から人夫を出したが、勝連かつれんと那城なぐくの屋慶名アカーやけなは、「私たちの班は月の上がるまで仕事をさせて下さい」と言ったら、役人は「それでよい」と言って働かせた。ところが月は昼間の三時頃に上がったらしい。それでさつさと切り上げて帰った。

これはうるま市よなしろと那城なしろに伝わる民話ではあるが、十日月は午後の早い時間に見えることを知らない役人はまんまと騙されたわけである。北中城村きたなかぐすだんには同じ話が、うるま市勝連平安名かつれんへいなん出身の勝連バーマと呼ばれた人にまつわる話として語られている。

(5) 「継子と二十日月」(梗概)

自分の子供には早めに夕ご飯を食べさせて寝させるが、継子には「二十日月が上がりないと夕飯はあげない」と言って、夜遅くに夕ご飯を食べさせた。

この民話は継子いじめの一例で、継子には夜遅くまで働かせ、お腹がすいても、深夜まで夕食をやらない。夜遅い時刻を表す言葉として「二十日月」が用いられる。

民話に見える月は、十五夜を題材としたものが主流のようである。しかも月の影の由来譚としたものや、十五夜または月拝みの由来譚となっているものが多い。またその時に供えられるフチャギという餅の形の由来やフチャギに関連した話に及んでいる。(4)は話型「言葉のごまかし」に属し、十日月はサブ

タイプとなっている。また(5)の「継子と二十日月」はそのまま話型として認定されている。このように十日月と二十日日が民話において語られた例は日本本土の民話には見られない。

四 八重山古謡・節歌と「月」

古謡・歌謡に月がどのように謡われているか見ていこう。

八重山の子守り歌には、昼に歌われるものと、夜に歌われるものがある。夜の子守り歌は「月の美しや」で始まる次のような歌詞になっている。

一 月ぬ美しや 十日三日

月の美しいのは十三夜

女童美しや 十七つ

乙女の美しいのは十七歳

二 東から あーりおーる

東から上ってくる

大月ぬ夜

大きなお月様

沖繩ん八重山ん

沖繩も、八重山も

照らしようり

照らして下さい

三 あんだぎなーぬ

あれ程の

月ぬ夜

月夜だから

ばがけーら

我々皆

遊びようら

遊ぼうよ

一番、二番、三番の歌詞にそれぞれ月が出てくるが、一番は、満月はやがて欠けていくので、やがて満月になろうとする一歩手前が最も美しいことを、女の全盛期とされた「二十歳乙女」に対比させ表現したものである。

日本本土の童謡に、

お月さんいくつ 十三七つ (じゅうさん ななつ)
そりやまだ若いな

あの子を産んで この子を産んで

誰に抱かしよ お方に抱かしよ

とあり、江戸時代(元禄期)鳥取藩の童謡集(日本随筆大成『筆のかす』引用)にも、

お月さまなんば、十三七つ、な、おり着せて、京の町
に出いたれば、笄落す

と見える、月の年齢を表現した「十三七つ」の解釈の元になるものと言われる。

二番では、八重山と沖繩を区別しており、ここでの沖繩は沖繩本島、さらに踏み込んで言えば琉球王府のお膝元的首里・那覇を指す。月の明かりが平等に照らすように、搾取する側とされる側の不平等を怨嗟的に謡ったものとの解することもできよう。

三番では、日頃の労働の疲れを癒やししながら、老若男女が浜辺に出て歌ったり踊ったりしながら楽しむ様子を謡っている。

この子守り歌の歌詞は他にもある。

西からあーりおーる 西から上ってくる

若月ぬ夜 三日月の夜

ばんちや家ぬ 頂までい 私の家の(屋根の)頂上まで

照らしようり 照らして下さい

若月とは三日月のことであるが、三日月は太陽に近いため昼間は太陽の輝きで見づらく、太陽が沈んだ後に西の空に忽然と

現れたように見えるのである。これを「西から上ってくる」と表現している。

人々が生活の中における月をどのように歌に詠み、子守り歌として伝えてきたかがわかる。

次に、三線伴奏を伴い歌われる「節歌」の傑作に「月ぬ真昼間節」というのがある。歌の出だしをそのまま歌の題名にしたものである。

月ぬ真昼間や 月が南中する時は

ヤンサ潮ぬ 真干り ヤンサという大干潮時で

夜ぬ真夜中や 夜の真夜中は

女童ぬ 潮時 恋女が人目を忍んで来る潮時である

注目すべきは、星の「真昼間」という言葉である。一般に昼間という語は昼の最中、白昼、すなわち太陽が出ている日中の意味である。しかし「太陽昼間」という言葉があることから、単なる日中ではない。竹富島の「まれちいユンタ」には、「星昼間」と「太陽昼間」が対句として出てくる。

月昼間 なりくんや 月が南中する頃に

太陽昼間 なりくんや 昼間のように明るくなった頃に

浜んかい ばがおーら 浜に出かけよう

渚んかい ばがおーら 渚に出かけよう

さらに星昼間という言い方も見える。黒島の古謡「南ぬ浦南崎ユングトウ」に、むれ星（すばる）昼間である。

むれ星昼間 スバルが南中する頃

大粟種 うとにん

大粟の播種を行

丸粟種 蒔くにん 丸粟種を蒔き

まきぼーり しきぼーり 蒔き散らそう

しかはで まぶい かわいい娘よ

こうした「月昼間」「星昼間」「太陽昼間」という言葉は、月や星や太陽の天体が南中（子午線を通過する）すること、すなわち高度が最大になることを意味する用語である。特に月の真昼間は、真の字が入ることによってより強調した表現になっている。

なお琉歌にも月は数多く詠まれていたが、八重山諸島の古謡・歌謡における月の表現は独特である。

五 沖繩の風をめぐる表現

(1) 風根

初めに、民間文芸ではないが首里王府編纂『おもろさうし』における風の用語から見ておこう。

『おもろさうし』では、船の航行に適した「追手風」すなわち順風の例として次のような風が見える。

「真南風」(卷十三・八八四・九〇二・九五〇)

「真東風風」(卷二十一・一四〇四)

「真北風」(卷九・一五二〇) 「真北上風」(卷十三・九一六)

このうち前二者については、

「真南風穴」(『おもろさうし』 卷十一・五一一)

「真東風穴」(『おもろさうし』 卷十一・五三五)

という用語もあり、その方角から吹いてくる風の源を「穴」に

見立てている（日本思想大系『おもろさうし』一八四頁注）。すなわち「てだが穴」と同じ発想で、風も穴から発生すると考えられていたことがわかる。⁽⁴⁾

しかし一方で、「風根」という言葉も用いられている『おもろさうし』第三「きこゑ大きみがなしおもろ御さうし」の一節に見える。

風の根も 風り直ちへ 風の根も 穏やかにして

久米の島 押し合わち 久米島

荒の根も 直ちへ 荒風の根も

金の島 引き合わちへ 金の島（久米島の美称）へ

日本思想大系『おもろさうし』は、「風の根」について「風の吹いてくる源」と注釈しており（五二頁注）、「風穴」と同義語とみなされている。

「風穴」の用例は前掲の『おもろさうし』の二例以外には確認できないが、「風根」は八重山の古謡や節歌にけっこう出てくる。

「まるまぶんさん節」には、

まるまぶんさん まるま盆さん

ユナユナ見りば 夕暮れ時眺めていると

風ぬ根を 知ち 風の方向を良く知っていると見えて

居ちゆる 白鷺 (島の反対側に) 坐っている白鷺よ

とある。

これは西表島西部の祖納湾に浮かぶ「まるま盆さん」をめぐらとする白鷺は、風の根を知っていて、風が吹いてくる反対側

まるま盆山（西表祖納）



に群がっている、という光景を詩にしている。これによれば、風根とは、風を生み出す根の意味で、風が吹いてくる方向を指していると言えよう。

ところが、竹富島の古謡には「風が根あゆー」（上勢頭亭『竹富島誌（歌謡・芸能篇）』）がある。

風が根や 風のもとは

何どう根やる 何がもとである

雲どうにぎーやる 雲がもとである

上が根や 上のもと

何^{なん}どう根^ねやる

何^{なん}がもとである

ぬりどうにぎ^{にぎ}ーやる

乗り雲^{のりぐも}がもとである

また「とぐるだきでらば」(与那国島)、『南島歌謡大成』IV
八重山篇』にも、同じく「風が根」が謡われている(わかりやすくするため、歌詞に漢字を宛て、訳に手を加えた)。

風^{かぜ}が根^ねや

風の根^ねは

上^{うへ}が根^ねや

上(風と同じ)が根^ねは

乗り雲^{のりぐも}ど本^{もと}

乗り雲^{のりぐも}が本^{もと}である

くぬ風^{かぜ}に

この風^{かぜ}に乗^{のり}って

くぬ船^{ふね}に

船^{ふね}を

いださば

出^いせば

根^ねだいすな

根^ねを絶^たやすな

本^{もと}だいすな

本^{もと}を絶^たやすな

やる風^{かぜ}

追^おい風^{かぜ}よ

くぬ風^{かぜ}に

この風^{かぜ}で

いださば

出^い船^{ふね}すれば

渡^{わたり}ぬ上^{うへ}にむたさば

海上^{かいじょう}に漕^こぎ出^いせば

(以下略)

「風が根」も「風ぬ風」も訳においては「風の根」と同じであるが、その意味するところは若干異なる。ここでは風の根の根は本の意味であり、それは雲であると謡っている。

しかし「風根」の主たる意味は、吹いてくる方角および源であり、風が吹き出る穴である。

新垣家文書「萬曆書」(伊平屋島)によれば、「風根」が農作

物の出来と年中運の占いに用いられている。

「毎年冬至之日未明ニ風根を見て来年作毛并年中運を知る事」
これは冬至の日の未明にどの方角から風が吹いてくるか、すなわち風根を見て、来年の作物の出来不出来や年の運勢を占っている。

このように人々は、風が吹いて来る方向に、風が発生する源(風穴)があると認識していたのである。

(2) ニングワチカジマーイ

旧暦二月から四月にかけて台湾付近で発生する低気圧を沖繩の方言でニングワチカジマーイと言う。かつては「台湾坊主」と呼ばれていた。急に発達し、早い速度で沖繩近海を通過し北東へ移動する。至る所で大きな被害をもたらすため、漁民の間でも恐れられた。それとおぼしきことが謡われているのが、八重山民謡の「高那節」である。この歌は意味不明なところが多く難解であるが、喜舎場永珣『八重山民謡誌』によれば、次のようにある。

ザンザプロウ(山三郎)という大和の人が、中国から日本への帰途、台風に遭って西表島の高那村に漂着したが、日本に帰らず、地元の女性を娶り永住した。ある年の三月三日、娘をはじめ村の青年男女が恒例の潮干狩りに出かけたところ、北方の空はにわか曇り旋風とともに豪雨となった。村では青年たちの安否を心配して大騒動になったが、しばらくして風雨はおさまり、青年たちは全員無事、島に

戻ってきた。山三郎が嬉しさのあまり歌ったのがこの歌である。

気候が急変した様子の箇所は次のように歌われている（大濱安伴編著『八重山古典民謡工四』上巻）。なお（ ）は喜舎場永珣『八重山民謡誌』の歌詞である。

雨が降るとうし（雨が降る時） 雨が降った時は

ヨーハンネ（ヨーアンネ） ネーお母さん

さー北から 北方の空から

曇るヤイスリ（ヤーエスリ） 曇ってきて

ゆみばするとうし（ゆばいする時） 風がにわか吹き荒れ

あーかめ くんがーやーり うーかしたえ

きーじんきーざざ きーざざ ざんざぶるに うざーざ

ざんざぶるうに むーすかーすぬ じんじんどー

サンサ むーすかーすぬ じんじんどー

今日ぬ ふくらしやや ハーリヤリヤ

このように、三月三日の潮干狩りの日に天気急変したとすれば、ニングワチカジマイであった可能性が大である。そうなる「高那節」はニングワチカジマイのことが歌われた唯一の民謡ということになる。

(3) 風の歌われ方

古謡や節歌によく登場するのは、例えば、「稲摺節」「波照間島節」「ボスポー節」などの一節に、

南風ぬ押しゆらばよ 南風に押されて

北ぬ畦は枕はし 北の畦を枕にするくらいの稔りだ

北風ぬ押しゆらばよ 北風に押されて

南ぬ畦は枕はし 南の畦を枕にするくらい上出来だ

とあるように、風が吹くと稲穂が風の反対側の畦にたわむほどの豊作状態を表現する場合である。

「橋世ば節」には、

夏なりば 南風吹きいん 夏季には南風が吹き荒れ

冬なりば 北吹きいん 冬季には西風が吹きすさみ

とあり、夏は南からの季節風が吹き、冬には北からの季節風が吹く。

石垣島の蔵元から首里王府へ御用布や上納米を運ぶ公用船（馬艦船）は夏の季節風を利用して、冬の季節風を利用して帰省したため、赤馬節の音曲に乗せて歌われる「旅行の時」の歌詞には、次のような風の表現が見える（喜舎場永珣『八重山民謡誌』）。

嘉例吉ぬ 今日出でいや 公用船が 今日出帆するが

午未ぬ 真ぬ風 東南風の 追い風で

（中略）

上るでいや 里之子 上沖の際には 里之子の船は

真南風ん うさいられ 真北風の 追い風で

下るでいや 真びぎりや 帰省の際には 兄上の船は

真北風ん 迎いられ 真北風の追い風に 出迎えられた

沖縄本島と鹿児島島の往復の場合もこの季節風が利用された。

琉球古典音楽の「上り口説」には「風や真艦に午未」「下り

口説くはせには「風や真艦まのかべに子丑こうち」と出てくる。

一方で南風は、伝言の役割も担った。「イヤリイ節」には、

うら頼たのま 南風みなかぜ

貴方を頼みましよう 南から吹く風よ

事こといつけ ういるけ

伝言を言付けよう 空を走る浮き雲よ

大石垣おおいしやんき主島あるじしま 吹き通し

大石垣島（主島）へ 吹き通していつてくれ

とあり、「とうばらーま」にも次のような歌詞が残されている。

南ぬ風みなかぜまぬ

南から吹さくる和風が

むぬ言いずむぬやりか

言葉が言えるものなら

ばあ事ことゆ いやりし

私の事情を伝言もし

問とひ聞きくんだら

問い聞きもするだろう

季節によって風が吹く方向が決まっている。すなわち夏は南風、冬は北風が吹く。そうした風によって豊かに稔った稲穂が揺れる様を歌にしているが、どちらかといえば季節風は帆船の時代の航海との関係で歌われることが多い。また「風の便り」「風の使い」などの用例も見られる。

(4) 民話における風

風を題材とした民話は以外と少なく、唯一、与那国島には、「うどんとミミズ」の話題で知られるものが、「二月カジマヤー由来」として語られている（日本の昔話30『沖縄の昔話』日本

放送出版協会、一九八〇年）

・夫に先立たれた妻は、女手一つで息子と娘を育て、息子は嫁をもらい、娘を嫁がせた後失明する。

・嫁は義母を疎ましく思い、目が見えない義母に毎日同じ食事を与え、母親はそれがおいしいので満足しながら食べる。

・ある日、嫁が先から娘が帰ってくるというので、母親はおいしいおかずをとっておき、娘にそれを差し出す。

・それがミミズであることを初めて知らされ、母と娘は嫁の虐待ぶりに悲しむ。

・幾日か過ぎたある日、母は息子と嫁を呼び、「北の島に宝物を埋めてあるのでそれを取りに行きなさい」と言うのと、欲張り息子夫婦は舟をこしらえて出かける。

・母が用意しておいたクバの扇であおぐと天気は急変し暴風雨となり、夫婦は舟もろとも波にもまれて死ぬ。

本来、カジマヤーとは数え九十七才の長寿の祝いのことであるが、この話は、姑いじめの嫁と息子をクバの扇で風を起こして謀殺したという内容で、カジマヤーとは関係がない。恐らく言葉の類似から混同したもので、旧暦二月に吹くニングワチカジマヤーの由来として語ったものであろう。

以上、民間文芸においては、人々が生活の中で感じている風がストレートに表現されている。また天候が急変するニングワチカジマヤーは取り上げられているが、不思議と、毎年襲来し

家屋や農作物に被害を及ぼす台風については古謡・歌謡や民話において全く見えない。

おわりに

日本本土に比べて琉球諸島は天体に関する民間文芸が豊富である。その要因の一つには地理的条件があったであろう。特に八重山諸島の石垣島は北緯二十四度に位置し、八十八星座のうち八十四の星と、二十一個の一等星が見え、日本の中では最も星座観察に適した地域であること。もう一つは暦が農民の間に十分普及せず、時節や季節風、農事の開始時期の目安はもっぱら月や星に頼っていたことが挙げられよう。要するに星や月や風は人々の暮らしと密接に関わっていたということである。そうした精神風土が民間文芸に多く取り上げられ、そして語り継がれてきた背景にあったと推察される。

注

- (1) 野尻抱影『星と伝説』（偕成社、二〇〇五年）、末岡外美夫『人間達のみた星座と伝承』（末岡喜江、二〇〇九年）所収。
アイヌタリ
- (2) 喜舎場永珣『八重山古謡』（沖縄タイムス社、一九七〇年）
- (3) 松浪久子『首のない影』攷（福田晃編『沖縄地方の民間文芸』三弥井書店、一九七九年）
- (4) 犬飼公之『風の宇宙―琉球文学の地平―』（『沖縄研究ノート』